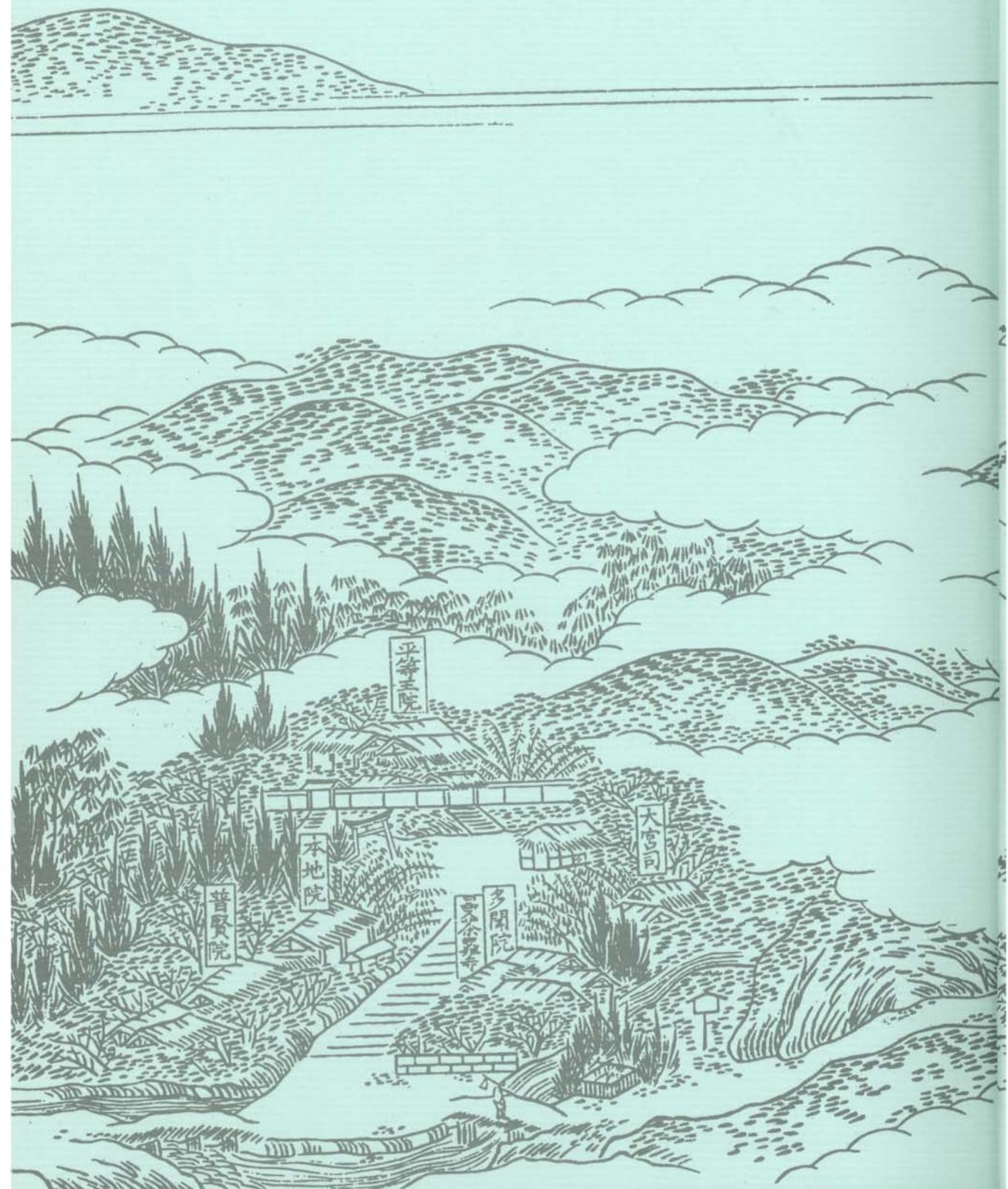




郡山郷土史

花尾大權現社
其一





郡山郷土史

(郡 山 町)



町役場全景



町章

郡山の「こ」と「山」の文字を図案化したもので、周りを囲むことにより円満と平和を、山と左右の広がり で発展する姿を象徴している。

郡山町町民憲章

私たちは明るく豊かな町づくりをめざし、次のことを生活信条とします。

- 一、進んで研修に努め、スポーツに親しみます。
- 一、お互いに力を合わせ、地域や町のためにつくします。
- 一、よい家庭をつくり、地域ぐるみで青少年をりっぱに育てます。
- 一、としよりを敬い、だれにも親切にします。
- 一、産業を盛んにし、郷土の自然をたいてせつにします

(町 花 木)



町花木「ツツジ」



町花「カンナ」



町木「イヌマキ」



開発の進む郡山麓・上園周辺

(自 然)



雪の八重山と運動公園



湯屋原遺跡発掘作業



八重山公園から三重岳・桜島を望む



轟滝(神の川)と公園



スパランド裸楽良

(産 業)



町秋季畜産共進会 (町畜産センター早馬)



レイシの出荷作業



早掘り筍



八重の棚田の稲刈



馬場市 (麓、昭和60年)

歴史的文化遺産



川田堂園供養塔群 (S38年県指定)



花尾神社社殿 (H14年県指定)



花尾の太鼓踊り



大平の獅子舞



岩戸の疱瘡踊り

〈無形民俗文化財〉



西侯の八丁杵踊り



西上太鼓踊り

(教 育)



文化祭 こおりやま太鼓演奏



体育祭 総合リレー



青少年の船 ひめゆりの塔参拝



わくわくふるさと塾



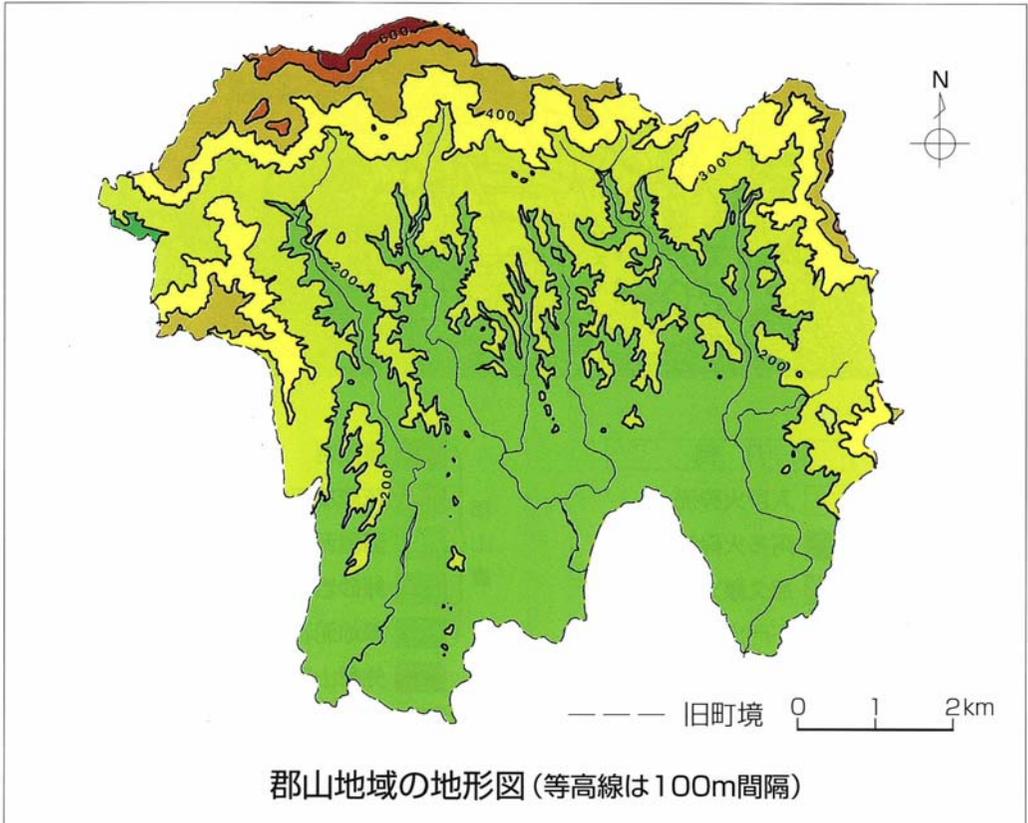
妙円寺詣(徳重神社)



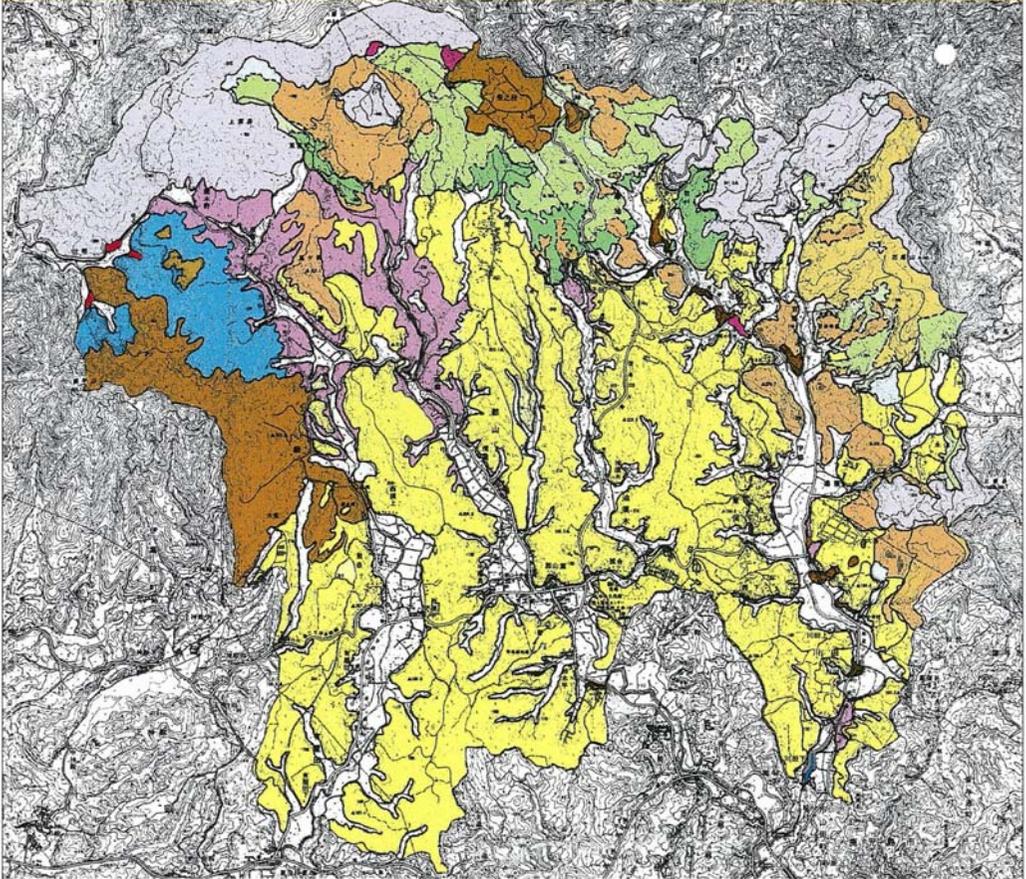
青少年の船 in 奄美大島



郡山町総合運動公園



郡山地区の地質



凡例	
	入戸火砕流
	阿多火砕流
	加久藤火砕流
	下門火砕流
	河頭(花倉)層
	花野火砕流
	後郡山層火山岩類

郡山層		貫入岩
		花尾凝灰角礫岩
		湯屋泥岩部層
		峠砂岩部層
		厚地泥岩部層
		先郡山層火山岩類
		仕明層
		仕明流紋岩



発刊のあいさつ
発刊に寄せて



発刊のあいさつ

鹿児島市長 森 博 幸

新しい郡山郷土史の発刊にあたり、ごあいさつ申し上げます。

昭和三〇年の町制施行以来、約半世紀にわたり歴史と文化を生かしたまちづくりを進めてこられた郡山町は、平成一六年一月一日、一市五町の合併により、新生鹿児島市としてスタートしました。

ご案内のとおり、郡山地区は、県の指定文化財に指定されている花尾神社社殿や川田堂園供養塔群をはじめとする多くの史蹟や文化財、特色ある郷土芸能などが数多く残っています。歴史と伝統ある郡山の文化を記録にとどめ、後世に伝えていくことは、今を生きる私たちの責務であり、今回の郷土史の発刊は、大変意義深いものであると思います。

これまで、同地区の郷土史は、郡山町時代の昭和四六年に、「古代から明治維新前後まで」の上巻が、また昭和五八年に「明治維新後から昭和三〇年前後まで」の下巻が、それぞれ発刊されております。今回の郷土史編纂は、前回の発刊から長期間が経過したことや、市町村合併の気運の高まりを受け、郡山町が平成一四年に「郡山町郷土史編纂委員会」を立ち上げ、前回以降の新しい研究成果も盛り込みながら、その編纂に着手されたと伺っております。

合併後は、これらの事務を「鹿児島市郡山地区郷土史編纂委員会」が引き継ぎ、この度の発刊に至ったものです。合併により、これまで親しんでいた町の名称が使われなくなったり、変わったりすることは、住民の方々にとって実に寂しいものがあると思います。

私は、合併後の新生鹿児島市が、速やかな一体化と均衡ある発展を図り、六〇万市民が合併してよかつたと思えるような様々な施策を進めているところです。そういう意味でも、自分たちの町の歴史や文化を学び、知ることとはとても大きなことであり、この郷土史が、郡山地区の方々、市民にとって、貴重な財産となることを願ってやみません。

郷土史の編纂にご協力いただきました専任執筆委員の先生方にはお忙しい中、原稿の執筆などご尽力賜り厚くお礼申し上げます。終わりに、この郷土史が多くの皆様に広くご利用いただき、郷土を愛する心を育んでいただきますことを心から念願致します。



発刊に寄せて

鹿児島市教育委員会教育長 石 踊 政 昭

このたび、新しい郡山郷土史が発刊されましたことを心からうれしく存じます。以前の郡山郷土史は、昭和四六年に、古代から明治維新前後までを記述している上巻が、また昭和五八年に明治維新から昭和三〇年ごろまでを記述している下巻が刊行されております。

この郷土史は、郡山の歴史をわかりやすく学ぶことのできる資料として、旧郡山町民の皆様方をはじめとする多くの皆様に広く活用していただいているところですが、以前の郷土史刊行から長期間が経過したことや、下巻の記述が昭和三〇年頃で終了していることから、新たな研究成果や昭和三〇年頃以降の記述も加えた新しい郷土史刊行の声が高まるとともに、市町村合併の推進により、変わり行く郡山の歩みを記録に残そうという気運が高まり、新しい郡山郷土史の編纂がスタートしたものでございます。

編纂中の平成一六年一月一日には、郡山町を始めとする周辺五町が鹿児島市と合併し、「新生鹿児島市」が誕生致しました。合併の後、「鹿児島市郡山地区郷土史編纂委員会」に引き継がれ、郷土史の編纂を進めて参りましたが、この度編纂が完了し、発刊の運びとなったものです。

今回刊行致しました郷土史は、以前刊行された郷土史を全面的に改定致しまして、郡山の歴史・風土・民俗などを、先史時代から現代に至るまで詳述したものであり、ご一読いただければ、郡山地区の歴史や文化が詳しく分かるものとなっております。ぜひ多くの皆様に一度手に取っていただき、多くの先人たちが郷土郡山の発展に尽くされたことに対しまして、思いをさせていただきますと存じます。

専門執筆委員の先生には、郷土史編纂委員会の立ち上げ以来、お忙しい中、原稿の執筆など、郷土史の編纂にご尽力いただきましたことにつきまして、心からお礼申し上げます。

最後に、この郷土史が、郡山地区の歴史を記録するすばらしい資料として、多くの皆様にご利用いただきますことを心から希望致しまして、発刊に寄せてのことばと致します。

凡 例

- ① 本書には通史編と資料編を掲載する。
- ② 郡山町は平成一六年(二〇〇四)一月一日、鹿児島市に編入合併したが、特別に断らない限り、「郡山町」「本町」「町内」などの記述は昭和三二年(一九五六)の町制施行から平成の合併までの郡山町域(現鹿児島市の花尾町・東俣町・川田町・油須木町・郡山町・西俣町・有屋田町・郡山岳町)を指す。
- ③ 本書では、特に断りが無い限り、平成一六年一〇月までを記述する。
- ④ 本書では、便宜上、昭和四六年と同五八年に編纂された『郡山郷土史』上巻・下巻を『(旧)郷土史』上巻・下巻と表記する。
- ⑤ 記述は原則として口語体・常用漢字であるが、引用文、固有名詞、専門用語の一部に限り、文語体・旧字体を使用することもある。
- ⑥ 昭和六一年七月に告示された「現代仮名遣い」を原則とするが、引用文は原文のままとする。
- ⑦ 難読と思われることばの読みがなは見開きの初出にのみ記した。
- ⑧ 数詞の表記には億・万の単位を入れる。ただし、引用文については原文のままとする。
- ⑨ 人名の敬称は、引用文を除きすべて略す。
- ⑩ 見開き初出の年号には()内に西暦を記すが、明治五年以前の陽暦と陰暦のずれは補正していない。
- ⑪ 南北朝の年号は南朝(宮方)・北朝(武家方)の順に並記する。
- ⑫ 引用文は「」で括るか、長文の場合は一字分下げて表記する。なお、引用文中の読解不能な箇所は口口と表記する。また、明らかに誤字・脱字と思われる箇所には、傍注で(ママ)(〇〇か)を記す。
- ⑬ 本文中の出典の詳細については、章・節末に一括して掲載する。
- ⑭ 図表は必要に応じて章ごとに通し番号をつける。
例「表キャプション」「表^章1—5^{順番}郡山町の人口の推移」
- ⑮ 歴史用語の中には、現在、差別的表現といわれるものもあるが、本書においては、正しい人権意識を培う目的において用いているものである。
- ⑯ 執筆者は巻末に記載する。

目次

発刊のことば	鹿兒島市長 森 博幸
発刊に寄せて	鹿兒島市教育長 石踊 政昭
凡例	

第一編 郡山町の概要

第一章 位置と面積	3
第一節 郡山町の位置	3
1 地理的位置	3
2 社会的位置	4
第二節 面積	4
1 総面積	4
2 面積の構成	4
第二章 気象	5
第一節 気温	5
第二節 降水量	6
第三章 人口	6
第一節 郡山郷から郡山町までの人口	6
第二節 集落別人口	8
第四章 集落・自治会	10
第一節 大字・小字	10
第二節 集落と公民館組織	13

1 集落	13
2 自治公民館・地区公民館	13

第二編 地形と地質

第一章 南九州における郡山町の地形・地質	19
第一節 大隅半島と薩摩半島を分かつ鹿兒島湾	19
第二節 鹿兒島湾に直交する火山岩からなる山塊	19
第三節 北薩地域に広がっていた湖	20
第二章 郡山町の地形	21
第一節 三方を山に囲まれた郡山町	21
第二節 河川と沖積平地	21
第三章 郡山町の地質	22
第一節 最も古い湖の堆積物、仕明層	22
1 植物化石「重平フローラ」	22
2 堆積年代	22
第二節 最も古い火山岩、清浦安山岩	23
第三節 北薩に出現した湖の堆積物、郡山層	23
1 厚く堆積した湖成層	23
2 湖底に噴出したマグマ	24
3 郡山層の堆積年代	25
4 郡山層産の化石	25
5 郡山層産の鉱物	25
第四節 郡山層以後の火山岩と火砕流堆積物	26

第五節	過去一〇〇万年の間に噴火した火砕流堆積物と海成層	26
1	花野火砕流	26
2	河頭層	27
3	加久藤火砕流	27
4	阿多火砕流	27
5	入戸火砕流	28
6	桜島薩摩テフラ	28
7	鬼界アカホヤテフラ	28
第四章	郡山町の地史	29
第一節	約三〇〇万年前に存在した湖	29
第二節	約二七〇〜二〇〇万年前に出現した巨大な湖	29
第三節	約二〇〇〜一〇〇万年前の火山活動と隆起	29
第四節	約一〇〇万年前と約三〇万年前に低地を埋めつくれた大規模火砕流	30
第五節	約一〇万年前と約二万五千年前の旧石器時代以降の大規模火砕流	31
第六節	桜島の噴火と侵食	31
第五章	郡山地区の地下資源と環境	33
第一節	地下資源	33
1	泥層と火山灰土壌	33
2	石材として切り出された溶結凝灰岩と安山岩	33
3	ミネラルを含む豊かな地下水	35
4	温泉	35

第三編	植物と動物	
第一章	植物	45
第一節	植生	45
1	鹿児島県本土の植生	45
2	郡山町の植生	46
第二節	郡山の貴重な植物	58
第二章	動物	75
第一節	哺乳類	75
第二節	鳥類	77
1	留鳥	77
2	夏鳥	78
3	冬鳥	79
4	旅鳥	80
第三節	爬虫類	81
第四節	両生類	82
第二節	地形・地質の役割	36
1	八重山の尾根	37
2	火砕流堆積物が造り出した天然ダム	37
第三節	地質災害	38
1	地滑りと崖崩れ	38
2	水害と涵養	40
5	オパールと黄鉄鉱	36

第五節	魚類・貝類	82
1	魚類	82
2	貝類	83
3	エビ・カニ類	83
第六節	昆虫	83
1	蝶類	84
2	甲虫類	85
3	セミ類	86
4	トンボ類	86
5	バッタ・コオロギ類	87
第四編 先史時代		
第一章	旧石器時代	97
第一節	氷河時代の地球	97
1	人類の出現	97
2	日本人の祖先	97
3	南九州の自然環境の変化	98
第二節	南九州地方の火山活動	99
1	始良カルデラ	100
2	薩摩火山灰	100
3	鬼界カルデラ	101
第三節	旧石器時代の概観	101
1	旧石器時代	101

2	九州の旧石器時代	102
3	南九州の旧石器時代	103
4	旧石器時代の集落	104
5	旧石器時代人の精神文化	105
6	旧石器時代人の食生活	106
7	旧石器時代人の狩猟	106
8	石器の種類と用途	107
第二章	縄文時代	108
第一節	南九州地方の縄文文化	109
第二節	縄文人	114
第三節	縄文人の交流	115
第四節	縄文時代の彩色土器	115
第五節	縄文人の食生活と環境	116
第三章	弥生時代	117
第四章	古墳時代	119
第一節	畿内型高塚古墳	119
第二節	古墳時代の熊襲・隼人の墓制	120
1	熊襲と隼人	120
2	地下式横穴墓	120
3	地下式板石積石室墓	121
4	土壙墓	121
第三節	古墳時代の集落	122
第五章	郡山町の歴史	123
第一節	郡山町の地理的環境	123

第二節	郡山町の歴史的環境	125
第三節	二万年前の郡山町周辺地域	126
第四節	郡山町内の遺跡	127
1	湯屋原遺跡	127
2	常盤原遺跡	137
3	宇都原遺跡	140
4	油須木城跡	140
第六章	郡山町および周辺の古代・中世	141
(コラム)	南九州の古人骨	145

第五編 古代

第一章	飛鳥時代の南九州	151
第一節	飛鳥の朝廷と隼人	151
1	隼人の登場	151
2	ヤマト王権と南九州	154
第二節	仏教の伝来	157
1	隼人の分断支配	157
2	仏教の弘布	158
第二章	薩摩国の成立と隼人の動向	159
第一節	薩摩国の成立	159
1	唱更国から薩摩国へ	159
2	薩摩国日置郡と郡山町域	163
第二節	薩摩国への律令制施行	165

1	六年相替の朝貢と班田制	165
2	「薩摩国正税帳」から見る	168
第三章	平安時代への推移	169
第一節	律令国家体制の挫折	169
1	国分寺経営と財政難	169
2	京田遺跡と条里制	171
第二節	隼人司と神話	173
1	隼人の呪力	173
2	日向神話の隼人	174
第四章	智賀尾神と神位奉授	175
第一節	智賀尾神と神位	175
1	従五位上の智賀尾神	175
2	智賀尾神社の遷座	175
第二節	神位奉授と南九州	176
(コラム)	国司による神階奉授	180

第六編 中世

第一章	中世の成立―島津荘寄郡満家院の成立	185
第一節	中世と荘園	185
1	中世の社会―朝廷政権と武家政権	185
2	荘園制	185
3	基本的な土地制度としての職の重層的体系	187
第二節	薩摩の荘園	188

1	初期荘園	188
2	島津荘	189
第三節	凶田帳にみる島津荘	192
1	建久凶田帳	192
2	島津荘の田数	193
第四節	薩摩国満家院	195
1	満家院の構成	195
2	満家院の院司	195
第五節	満家院における中世の成立	198
第二章	中世前期	200
第一節	鎌倉幕府と地頭制	200
1	鎌倉幕府の成立と鎌倉將軍	200
2	文治の地頭設置の勅許	201
第二節	惟宗忠久の登場と島津荘	203
1	史料からみる忠久と伝承される忠久	203
2	島津荘の惣下司職	204
3	島津荘の惣地頭職	204
第三節	忠久の薩摩国での御家人統率	205
1	三ヶ国惣地頭としての忠久	205
2	薩摩国守護・地頭としての忠久	207
第四節	満家院の院司と地頭	209
1	凶田帳記載の院司と地頭	209
2	承久の変	211
第五節	満家院内の郡司と名主	212

1	税所氏の郡司職	212
2	名主職	213
第六節	蒙古襲来と満家院	216
1	モンゴルが元朝となり、日本を襲う	216
2	動員された満家院の領主	217
第七節	中世前期の御家人、非御家人	220
第三章	中世中期	221
第一節	鎌倉幕府の崩壊	221
1	朝廷の倒幕の動き	221
2	後醍醐天皇と足利尊氏	224
第二節	建武政権と足利政権	225
1	尊氏勢が六波羅を襲い鎌倉幕府が崩壊	225
2	九州、中国地方での戦い	228
3	湊川の戦いと満家院勢	229
第三節	薩摩とその近辺の動き	231
1	南北朝期成立期の日向大隅での争い	231
2	南北朝期初期の薩摩での争い	233
3	南北朝前期の戦い	236
第四節	南北朝期中、後期の争い	239
1	南北朝中期の動向	239
2	満家院での動向	240
3	忠国のもとでの満家院	242
4	南北朝後期の動向	244
第五節	満家院の村と一族	245

1	満家院の名主職	245
2	満家院の地頭職	247
第六節 室町期の争い		
1	室町前期の戦い	248
2	室町後期の戦い	252
第四章 中世後期		
第一節 戦国期と織豊政権期		
1	中世後期の満家院	255
2	応仁文明の乱	255
3	戦国大名	257
4	中世後期の時期区分	257
第二節 鹿児島の中世後期		
1	鹿児島の中世後期	260
2	鹿児島の中世後期から戦国前期の前半期	261
3	文明年間の合戦と満家院	264
第三節 戦国大名島津氏の登場―鹿児島の中世後期の後半期		
1	島津忠良	268
2	鹿児島の中世後期から戦国中期に	273
第四節 戦国大名島津氏の活躍		
1	鹿児島の中世後期	275
2	鹿児島の中世後期から戦国後期・織豊政権期	277
(コラム) 川田義朗―軍配者の道の奥義を究め、戦国大名島津氏を支える		
280		

第七編 近世

第一章 藩政の成立		
第一節 鹿児島城の誕生		
1	鹿児島城築城までの城郭変遷	285
2	薩摩藩本城は鹿児島城か瓜生野城か	285
3	城下町の建設	287
4	瓜生野城再燃	288
5	城下町の整備	289
第二節 藩政の成立		
1	藩士の職掌と家格	290
2	藩の行政組織	291
第二章 外城郡山		
第一節 外城制度の成立		
1	外城とは	293
2	外城の成立経緯	294
3	薩摩藩領外城数	295
4	外城から郷へ	296
第二節 城下と外城の連絡		
1	連絡網	297
2	寛永期の軍事網	299
第三節 郡山外城(郷)		
1	旅行者からみた外城(郷)	299

2	郡山地頭系図……………	299
3	伊集院地頭系図……………	301
4	地頭仮屋と麓……………	301
5	郡山衆中と伊集院衆中……………	302
第四節 郡山外城(郷)行政組織……………		
1	地頭入部……………	303
2	掛持地頭支配の実態……………	306
第三章 郷士制度……………		
第一節 郷士と郷政……………		
1	外城衆中から郷士へ……………	307
2	武士の多い薩摩藩―郷士の存在……………	308
3	郷(外城)所役……………	309
4	所役規定……………	311
第二節 郡山郷士……………		
1	史跡にみる郡山郷士……………	312
2	系図・史料にみる郡山郷士……………	313
第二節 藩政史料に表れた郡山町……………		
1	島原の乱と郡山衆……………	315
2	嶽村銅山試掘……………	316
3	東俣御茶屋……………	317
4	花尾鹿倉……………	318
第四節 越中売葉と郷村……………		
1	外城(郷)を区分する……………	318
2	売葉商人の出入手続き……………	321

第四章 農村制度……………		
第一節 郡山町域の郷村と人口・石高……………		
1	江戸時代の郡山町域……………	322
2	江戸時代の郡山町域の人口……………	323
3	郡山郷の郷高・村高・耕地面積……………	329
第二節 薩摩藩の農村支配と郡山郷の村……………		
1	薩摩藩の門割制度と郡山郷の村支配……………	336
2	薩摩藩の内検と郡山の部分検地……………	341
第三節 薩摩藩の農地と百姓の負担・暮らし……………		
1	薩摩藩の農地の種類……………	346
2	薩摩藩の門百姓の負担……………	350
3	百姓の農事への関与と規制……………	354
4	日常の暮らしや生活への干渉……………	355
5	薩摩藩の百姓の年貢率と窮乏生活の主因……………	357
第五章 教育制度と郡山……………		
第一節 藩校造士館教育……………		
1	薩南学派の誕生と儒学の興隆……………	360
2	造士館の創設……………	360
3	藩校における教育の機会……………	362
第二節 郷中教育……………		
1	郷中教育の特色……………	364
2	「二才咄格式定目」……………	364
3	藩洋学と郡山郷士……………	366
4	孝行啓蒙……………	368

第六章 一向宗禁制と隠れ念仏

第一節 一向宗禁制

1 「初見史料」

2 「日新菩薩記」

3 慶長二年以前の諸史料の検討

4 一向宗は邪宗か

5 禁制の理由

6 宗門改

第二節 隠れ念仏

1 薩摩藩のかくれ念仏

2 郡山の一向宗

第三節 越中売薬と一向宗禁制

1 薩摩藩内の越中売薬業者

2 売薬業者の役割

第七章 藩外交史と花尾神社の琉球扁額

第一節 薩摩藩の琉球出兵

1 琉球出兵の真意

2 琉球統治機関の整備

第二節 琉球使節

1 琉球使節とは

2 使節の意義

第三節 琉球館

第四節 琉球扁額

(コラム) 発見された孝の人、百左衛門

388 384 384 382 382 382 381 381 381 379 378 378 376 375 375 375 374 373 372 371 370 370

第八編 近現代

第一章 近代化への胎動

第一節 幕末維新から明治へ

1 戊辰戦争と郡山郷

2 兵制改革

3 諸郷軍政の強化

第二節 西南戦争

1 最後の士族反乱

2 出征記録

第二章 行政

第一節 明治・大正・昭和初期

1 戸長

2 郡区町村制

3 新郡山村の誕生と新日置郡

4 役場移転と役場事務

5 昭和初期―戦時下の行政

第二節 戦後の行政

1 改革の嵐

2 部落会・隣組の廃止

3 農地改革・農業協同組合

4 役場職員の漸増

第三節 町制施行後の行政

1 下伊集院村一部との合併

412 412 411 409 408 408 408 406 406 405 404 403 403 403 397 396 396 395 394 393 393 393

2	町制施行と祝賀式	413
3	行政の方針と諸計画	414
4	町制一〇周年記念式典・祝賀会	416
5	名誉町民・町民表彰	417
6	郡山町役場新庁舎	418
7	行政改革の推進	419
8	広域市町村圏と一部事務組合	419
9	第四次総合振興計画(平成六〇一五年度)	421
10	単年度に見る主要施策	423
11	地域振興マスタープラン	424
第四節 行政機構・組織		
1	役場機構の展開	428
2	行政委員会	430
3	町長・執行機関の付属機関	431
4	新部落会・部落公民館・公民館統合	432
第五節 市町村合併と閉町		
1	市町村合併へのあゆみ	434
第三章 財政		
第一節 戦後郡山村の財政		
第二節 町制施行後の財政		
第四章 議会		
第一節 戦前・村議会時代		
1	区町村会の開設	446
2	「市制」「町村制」	446

第五章 選挙		
第一節 戦前の主な選挙		
1	概観	455
2	衆議院議員選挙制度	455
3	府県会議員選挙制度	456
4	郡会議員選挙	456
5	区町村会議員選挙	457
6	戦後直後の選挙	457
第二節 主な選挙の執行結果		
1	各種選挙の結果	458
第六章 経済		
第一節 近代の経済		
1	地租改正	462
2	資本主義経済の成立・確立	465
3	戦間期の経済	469
4	戦時経済	471
第二節 町議会の組織・構成		
1	議員定数、議会の組織	450
2	議会事務局、議会費	451
第二節 町議会の審議・諸活動		
1	定例会・臨時会	452
2	会議・付議事件等審議	452
3	議会の諸活動	453
第三節 村議会と郡役所		
1	議会の組織・構成	450
3	村議会と郡役所	447

5	大戦下の経済	473
第二節	産業の発展	477
1	農業振興	477
2	農産物生産の動向	484
3	林業・林産物	491
4	製造業	494
5	商業	496
第三節	生活と産業のインフラ	497
1	道路	497
2	交通手段	500
3	生活インフラ	502
第四節	現代の経済	503
1	戦後復興期の経済	503
2	高度成長期の経済	509
3	安定成長期以降の動向	514
4	平成不況期	516
5	郡山町経済の特徴	523
第五節	産業の動向と振興政策	533
1	農業の概況	533
2	農産物生産物の動向と振興施策	540
3	林業	555
4	商工業	561
第六節	産業と生活のインフラ	572
1	住宅―住宅団地と公営住宅	572

2	水道	573
第七章	社会福祉	575
第一節	戦前・戦時中の社会福祉事業	575
第二節	戦後の社会福祉	577
1	福祉立法の整備	577
2	高齢者福祉	578
3	障害者福祉	585
4	児童・母子家庭等の福祉	591
5	生活保護	599
6	社会福祉協議会・ボランティア活動	599
第二節	社会保険	600
1	戦前・戦時中の社会保険	600
2	戦後の社会保険	602
第八章	医療・保健衛生	606
第一節	医療	606
1	戦前の医療	606
2	戦後の医療	608
第二節	保健・予防	611
1	戦前・戦時中の保健衛生	611
2	戦後から町制下の保健衛生	617
第九章	保安・消防・災害・防災	627
第一節	警察	627
1	戦前の警察	627
2	戦後の警察	628

第二節	消防	629
1	戦前の消防組織	629
2	警防団―戦時下の消防組織	630
3	戦後の消防	631
第二節	災害	633
1	戦前の主な災害	633
2	戦後の災害	634
第四節	防災	640
1	防災体制の整備	640
2	防災計画	641
第一〇章	交通・通信・生活環境	644
第一節	道路	644
1	戦前の道路の整備・拡張	644
2	戦後の道路整備	646
3	道路計画	648
第二節	交通	649
第三節	通信	653
1	郵便	653
2	電信・電話	656
第四節	生活環境	658
1	環境の現況	658
2	郡山町環境基本条例・計画	662
第一章	学校教育	666
第一節	明治期の学校教育	666

1	草創期の学校教育―混乱の中の出発	666
2	整備期の学校教育―小学校制度の整備	670
3	拡充期の学校教育―就学率の向上と教育費の増大	673
4	明治中・後期の郡山の子どもの生活と学校の様子	677
第二節	大正・戦前昭和期の学校教育	682
1	大正期の学校教育―小学校教育・実業教育の拡充	682
2	花尾尋常小学校分離新設問題	687
3	大正期の郡山の子どもの生活と学校の様子	691
4	戦前昭和期の学校教育	694
第二節	第二次世界大戦後の学校教育	701
1	六・三制の出発	701
2	高度経済成長下の学校教育	705
3	平成期の学校教育	711
第二章	社会教育・社会体育・文化	714
第一節	第二次世界大戦前の社会教育	714
1	戦前の社会教育略史	714
2	健児団	714
3	戦前の青年団	716
4	戦前の婦人会	719
第二節	戦後の社会教育	725
1	社会教育の振興・充実	725

2	青少年教育	726
3	成人教育	734
4	社会教育関係団体	736
5	公民館	745
第二節 社会体育		
1	郡山町体育協会	751
2	スポーツ団体	752
3	各種体育行事・スポーツ大会	753
4	社会体育施設	755
5	社会体育振興策	755
第四節 文化・文化財		
1	郡山町文化協会	756
2	文化財	758
第九章 文化財		
第一章 花尾神社		
第一節 「薩摩日光」花尾神社		
1	由緒	765
2	神社とその周辺	766
3	花尾詣	768
4	誌された花尾神社	769
第二節 花尾山と信仰		
1	「花尾」の由来	770

2	厚智山権現の創建	771
3	霊峰花尾山と修験	775
4	鎌倉末期～戦国時代の花尾社	775
第三節 島津家祖廟―花尾権現		
1	江戸時代の花尾権現	777
2	寺社家の格式と神主貴島家	783
3	花尾権現と厚地村	784
4	江戸時代の祭礼	786
5	廃仏毀釈	787
第四節 花尾神社の宝物		
1	神像	788
2	奉納鏡・太刀・書・額など	789
3	頼朝ゆかりの品	791
4	琉球扁額	792
第五節 町外の花尾神社		
第六節 社殿天井絵に描かれた植物		
第二章 郡山の寺院		
第一節 神社		
1	現存する神社	799
2	合祀された神社	807
第二節 寺院		
1	現在の寺院	808
2	古寺	810
第三章 史的石造物		
		813

第二章	第一節	墓・墓石塔群	813
	1	歴史的人物の墓	813
	2	墓石塔群	815
第二節		石造物	818
	1	仏教関連の石塔	818
	2	その他の石塔	821
第一〇編 民俗			
第一章		衣食住	827
第一節		衣服	827
	1	晴れ着	827
	2	普段着	827
	3	仕事着	828
	4	衣料小物	830
	5	衣服の素材と手入れ	830
第二節		食生活	832
	1	主食	832
	2	副食	832
	3	保存食	833
	4	調味料	834
	5	その他の手作り食品	835
	6	行事食など	837
第二節		住居	849

第一章	第一節	屋敷構え	849
	2	母屋	850
	3	付属の建物	853
	4	畳と灯り	855
	5	建築儀礼	856
第二章		郡山の諸職	859
第一節		木工	859
	1	飯匙(メシゲ)	859
	2	桶屋	860
第二節		炭焼き	862
第三章		人の一生	865
第一節		産育	865
	1	妊娠	865
	2	出産	866
	3	成長	868
第二節		成人式	870
第三節		婚姻	872
第四節		葬式	875
第四章		年中行事	878
第一節		正月の行事	878
第二節		春の行事	883
第三節		夏の行事	885
第四節		秋の行事	888
第五節		冬の行事	892

	第五章	民間信仰	896
	第一節	民間信仰(講・祭り)	896
1		田の神講	896
2		天神講	898
3		山の神講	899
4		庚申講	900
5		馬頭観音祭	901
6		氏神祭	901
	第二節	民間療法・まじない・祈祷・占い	902
1		民間療法	902
2		まじない・験担ぎ	903
3		祈祷や占い	904
	第六章	民話・伝承	904
	第一節	民話と伝説	905
1		きつねと与助どん	905
2		笹之段のきつね松	906
3		東俣西下んおっ盗られ田の神様	907
4		岩戸のお地藏さん	909
5		ふるさとに石橋を残した東門の百左衛門	909
6		孝心深い幸兵衛	911
	第二節	ことわざ・言い習わし	911
1		日常生活	911
2		気候	916
3		農作業	916

		4	子どもの躰	917
		5	俗信	917
	第七章		こどもの遊び	918
	第一節		軒あそび	918
	第二節		外あそび	920
	第八章		民俗芸能	923
	第一節		太鼓踊り	923
1			花尾の太鼓踊り	923
2			西上の太鼓踊り	926
3			その他の太鼓踊り	927
	第二節		棒踊り	927
1			大平の獅子舞(付 棒踊り)	927
2			その他の棒踊り	930
	第三節		疱瘡踊り	933
1			岩戸のほうそう踊り	933
2			その他の疱瘡踊り	935
	第四節		その他の民俗芸能	936
1			西俣の八丁杵踊り	936
2			子供の手踊りと芝居	937
	第五節		民謡・里謡	938
1			労作歌	938
2			祭り歌・祝い歌	939
3			踊り歌・舞謡	939
4			座興歌	943

5	子守唄	943
6	行事の歌	944

第一編 資料編

第一章	古代	5
第一節	日本三代實録	7
第二節	薩摩国正税帳	15
第二章	近世	19
第一節	花尾神社関係資料	21
1	花尾権現御祭之事 享保二三年(一七二八)	21
2	廃寺之節花尾山江仰渡之写 慶応三年(一八六七)	27
3	棟札 嘉永五年(一八五二)	29
第三章	近現代	31
第一節	郡山町、町歴代三役、議長、教育長	33
第二節	各学校校歌、歴代校長	35
第三節	戦没者一覧	45
第四章	ふるさとの記録	55
第一節	字・小字一覧表	57
第二節	石碑・記念碑・歌碑	71
第三節	ふるさとの唄・町歌・音頭・イメージソング	90
第五章	郡山町年表	95

郡山郷土史編纂関係者	121
------------	-----

編集後記	郷土史監修委員 郡山繁幸	124
------	--------------	-----

表紙題字	三浦 馨	カッタ	米山さち子
------	------	-----	-------

